ＮＥＷ　　第４号　　２０２０、７、１４

直方ミニバスケットボールクラブだより

「子どもの世界」で日々成長する子どもたち

子どもの成長の姿

この子たちの姿も含めて、子どもたちが日々成長する姿が見られます。

- あいさつができなかった子が、来た時も、帰る時も、ちゃんとあいさつするようになった姿。
- 連絡しなければならないことを、自分でちゃんと言えるようになった姿。
- 練習中うまくできなくて、泣いてうずくまっていた子が、次の日からは、できなくても最後までがんばれるようになった姿。
- うまくできなくて、ゲーム中コートから出て、もうやろうとしなかった子が、次の日から約束を守って最後までがんばれるようになった姿。
- ゲーム中こけて泣いてしまうかと思ったら、泣かずに立ち上がり、次の番もまたコートに出ていってプレーできた姿。

いろいろな個性、特性のある子どもたちですが、それぞれ日に日に成長していく姿が本当によくわかります。

６年生の自覚と責任感を促す

子どもたちの成長を目の当たりにしながら、指導を楽しんでいる毎日ですが、チームづくりは、まだこれからです。スタートラインに立ったくらいの段階です。チームづくりへの意識化には、６年生の自覚と責任ある行動が欠かせません。それは、まだまだです。

直方クラブは、毎年の６年生が主体となって活動をつくり、チームをつくりあげていきます。その心がまえのようなものは、３月のお別れ会で、その年の６年生から５年生にバトンが引き継がれていきます。しかし、今回はそのような場の設定がないまま昨年度の６年生がいなくなり、今年度のスタートができないまま６月までが過ぎ、という状態できていますので、その心がまえができてないことも当然と言えば当然です。

しかし、そのままでいいということにはなりません。活動が再開した以上、６年生が６年生としての自覚と責任感をもって主体的に活動をリードしていかなければ、活動もチームづくりも前に進みません。今年の６年生が、どんなクラブにしたいか、どんな活動をしたいか、どんなチームをつくりたいのか、そのことを整理し、下級生に知らせ、いっしょにがんばることを確認し合う場が必要です。それをつくるのも６年生自身です。

先日、次のようなことを子どもたちに話しています。以前の『たより』でも紹介しました。

いったん集団に所属したら、自分がとるすべての行動は、いいこともわるいこともチームに影響する。もちろんわるい影響ではなく、いい影響をあたえてほしい。特に６年生は、その先頭でリードする立場。何か行動をとろうとするときに、自分のことだけを考えて動くのではなく、下級生のこと、チーム全体のことを考え判断し行動することが求められる。そのことを意識して、これからの直方クラブの活動に自覚と責任をもって取り組んでいこう。

このとき、「直方クラブの活動、チームを、つくっていくのは６年生だ。そのことを意識して…」と投げかけてはおきましたが、ここまでまだ具体的な動きはなく、昨日（日）、さらに追加の話をしています。

活動もチームも「つくる」もの。「つくる」ということは、何もせず放っておくことではない。図工の時間、粘土で作品をつくりましょうと言われても、ただ見てるだけでは作品にはなっていかない。家庭科で、料理をつくりましょうと言われていい食材を目の前に用意されても、ただ見てるだけでは、おいしい料理にはならない。材料にうまく手を加えて「つくる」作業をしてはじめていい作品になったり、おいしい料理になったりする。

それと同じで、自ら何も手を加えず、ただいつも通りやってるだけでは、楽しい活動も、いいチームもできない。まず６年生自身が、どんなクラブにしたいか、どんな活動をしたいか、どんなチームにしたいか、それを考え整理し、それを下級生に理解させ、具体的にどこをどうしていきたいのか、どうしてほしいのかを言っていかないと…。そして何より、それを実現するために、６年生自身が行動で示していかないと…。

粘土の作品や、おいしい料理は、多くの場合、そんなに長い時間をかけてつくることはないが、クラブの活動やチームづくりは一日二日でできるようなものではない。一日一日をつみあげながら、一年かけてつくっていく。その一日一日に自分は「つくる」ために何をしたかが大事。「つくる」ために自分は何も手を加えていないということなら、６年生としての役割は果たしていないことになる。

“つくる”

ここから、子どもたちが６年生を中心にどのように変化・成長していくか楽しみです。私たち指導者の果たすべき役割も同様で、ただ見ているだけでは、子どもは育ちません。子どもたちが主体的に動き始めるための刺激をし、動き始めたら必要に応じてそれをサポートしたり、子どもたちの求めに応じてアドバイスをしたりすることが必要です。

子どもたちのことについては、コーチと常々話しながら指導にあたっています。私が大切にしたいことを理解してくれながら、子どもと適切な距離感で、必要なかかわりをもってくれています。もちろん、場面場面では、どうかかわったらいいかと迷うこともあるようですが、それは私も同じです。子育て、教育は、何十年やっても、常に手探りです。大事なことは、子どもの状態をていねいにみとったうえで、必要と思うかかわりをもつこと。迷うときにはひとりで抱え込まず、判断せず、私と相談して対応すること、こんなことを申し合わせながら、指導にあたっています。